



執筆者

潤間 励子

うるま れいこ

千葉大学総合安全衛生管理機構 教授

1992年千葉大学医学部卒業。千葉県内で呼吸器内科医として勤務したのち、2009年より千葉大学で大学保健管理に従事し、2022年より現職。総合内科専門医、呼吸器専門医、結核・抗酸菌症認定医。

大学生を守りたい

コロナで一変した学生の生活 「ホケカン」も感染症に関する支援が主体に

私は大学生と大学教職員の健康安全管理を担う大学保健管理施設、通称「ホケカン」に勤務する医師です。平時は学生・教職員の健康診断、けがや急病の応急処置、メンタルヘルス相談、産業医業務などを行っています。2020年1月から、新型コロナウイルス感染症（コロナ）により、その業務の多くが感染症対策に割られるようになりました。

◆◆◆
2020年1月、ちょうど大学は入学試験のシーズンに入ったところでした。コロナの感染経路はまだわかっておらず、罹ったら肺炎になって大変なことになると思われていました。「全国から大勢の受験生が集まる入学試験を無事終わらせなくては！」と新型インフルエンザ流行の際に備蓄したマスクや手指消毒を掘り出し、すべての入試が終わった時には本当にホッとしました。この頃、海外へ卒

業旅行に行った学生もいました。ちょうどヨーロッパでコロナがはやっていったため、予約したホテルに着いたら「アジア人はコロナを持ち込むから泊めない！」と追い出され、寝る場所を探すのに難渋したという話も聞きました。

◆◆◆
次は卒業式です。大人数が集まるイベントは禁止されており、卒業式はもちろん、謝恩会もサークルの追い出しコンパも禁止。辛うじて卒業証書を渡すセレモニーだけ行われました。

◆◆◆
当然入学式も中止で、2020年入学生は入学式なし！ 新歓行事なし！ キャンパス入構規制でオンライン授業のみ！ という大学生活が始まり、結局秋の大学祭もなし。1年後に聞いたら「せっかく合格した大学に来たのは入学手続きの時だけ」という気の毒な学生もいました。この学年は2021年もサークルの活動はあまりできず、大学祭も2年続けて中止だったので、今年サークルの幹部学年になったのに新歓行事や大学祭のイベントのやり方がわかりません。事務職員や教員が運営の仕方を教えなければなりませんでした。

◆◆◆
わが大学で最初にコロナに罹った学生の報告があったのは2020年7月でした。若者が飲み会をやつてうつてくるという論調もありましたが、実生が家族からうつて、聞き取りの保健師さんに不安で涙ながらに話をするというケースもあったのです。

◆◆◆
2021年になるとコロナに罹る学生も増えてきました。コロナになった報告

を受けるとホケカンで健康観察をしますが、デルタ株の流行では、罹患した学生の記録入力がないと「急変!？」と電話を何度もかけ、下宿へ生存確認に行くこともありました。そんなデルタ株による第5波の真つ只中で大学でのコロナワクチン接種を行ったのですが、学生たちは大学生活を取り戻すため先を争って予約を取り、接種を受けてくれました。

◆◆◆
しかし2022年正月、成人式に伴い全国各地で30人程度の間窓会が多数行われたようで、地元から戻った2年生から次々に陽性報告が入りました。彼らの人生の中でこの成人式がどのような思い出として刻まれたのか心配ではありません。

◆◆◆
ワクチン接種が進んだことで2022年度からは対面授業が主体となり、課外活動も制限が少なくなりました。そうすると、オミクロン株による第6波の中でも飲み会を開く学生が出てきました。そこから患者さんが発生すると、学生間でも「ちゃんと報告すべき」「その必要はない」と意見が分かれることがあるようです。どちらも自分たちでちゃんと感染対策は行うという前提があるので見守っています。対立するだけではなく、それぞれの立場や意見を尊重してくれるとよいと思っています。

◆◆◆
コロナのパンデミックで大学生の生活は大きく様変わりし、ホケカンの支援も感染症に関するものが主体となってきました。今後は、そういった社会習慣の変化に戸惑う学生のケアも必要だと感じています。